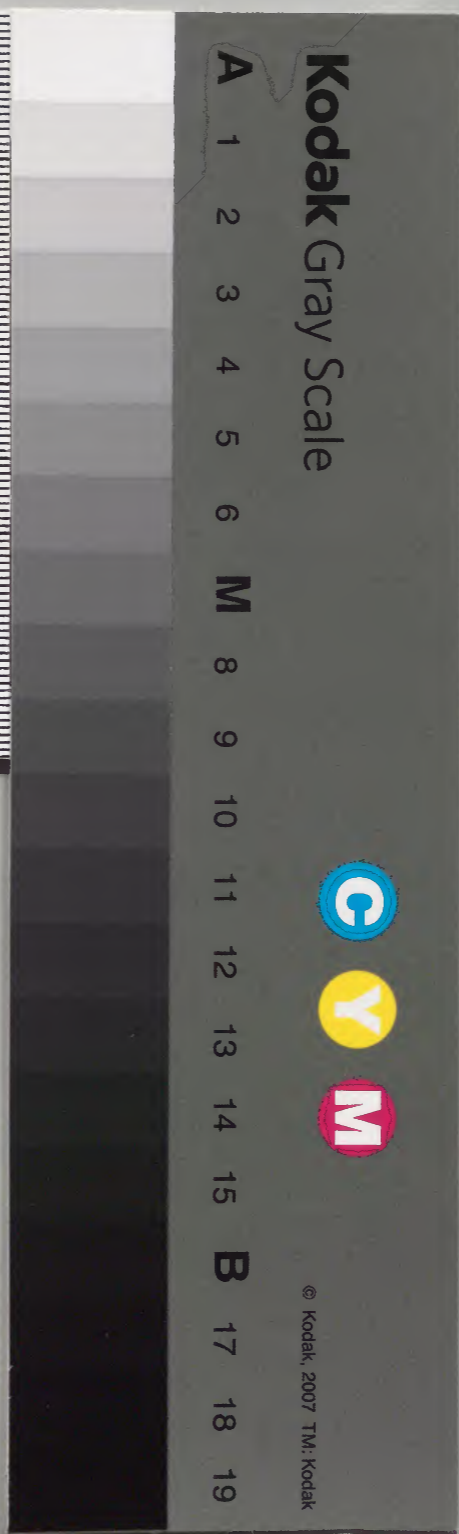


朝風堂林杏

和書門			
類	二七九七〇號	八七函	六〇册

内閣文庫			
類	二七九七〇號	六〇册	四函

内閣文庫	
番號	和 27970
冊數	60 (16)
函號	214 13



萬國新話

南浦文集

繪本福壽草

鳴呼矣草

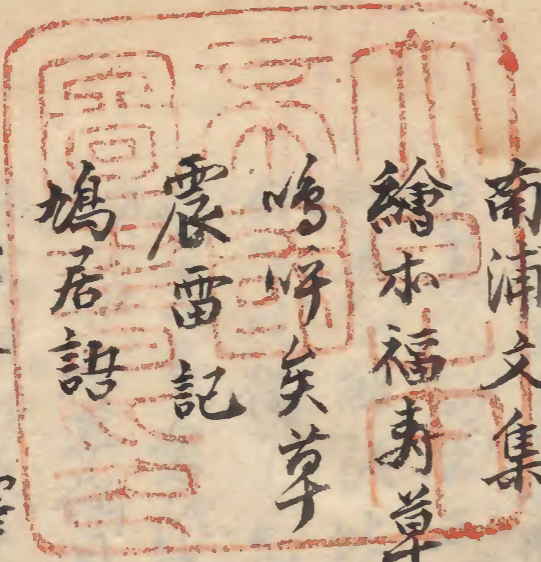
震雷記

鳩居語

西要抄言釋

西溪叢語

冷齋夜話



精要算法

夜航閑話

夜半樂

續入名女中卷

鍾秀集

歸命本願抄言釋

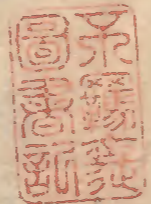
父子相迎言釋

芥隱華記

居東集雜錄



明治十三年購本



竺志和物語

海人藻芥

隣女晤言

諸古新本草
南唐本草
本草綱目
本草綱目
本草綱目
本草綱目
本草綱目

古今中外
古今中外
古今中外
古今中外
古今中外
古今中外
古今中外

○萬國新話

東都 森嶋中良 編輯



如德亞の西小國あり。連馬斯谷と云ふ。一人一葉と製入。此
の毒を解ひ此葉試む。先づの毒蛇を算りて。身
を咬傷し。毒を吐き。腫脹し。其の葉を。許を
明人の説。本草綱目。底野如。苦寒。其毒。百病中
惡。客忤。邪氣。心腹痛。積聚を治す。集解。小蘆茶
曰。西戎より出。彼人より。猪膽を用。此は。仙
形。久壞の丸。葉。小。似。赤。黒。走。り。想。先。生。の。説。曰。華。人。の。説。
彼。邦。の。苦。壺。丸。も。家。邦。の。と。同。く。胡。人。の。説。曰。久。壞。丸。葉。小。似。赤。黒。走。り。是。也。

知あれども、目のあつらひ強きと云ふ事なきなり。汗を奪ひ、眠成候。瘧疾頭痛ナリ。嘔吐ナリ。と云ふ免物隔ふをみる所也。胸をさすて心氣安らむらと志川の癩痛。病氣。其後もろくの痛成りけり。食毒酒毒を解し。瘧疾麻疹もろくも切り。熱て熱氣も各病の。邪もろくも。病の信奈もろくも。癩癩瘡。疫痛もろくも。熱の。便毒。虫さし。等。及風犬の咬傷もろくも。古酒もろくも。大人。小徳子。一箇もろくも。病もろくも。二箇もろくも。後

と一し。小兒の黒豆一粒もろくも。弟もろくも。白濁もろくも。送下

○米府算學士雄山藤田定賢子證精要算法自叙曰
我聞夫子孝和天授之才命世之器六歲ノ時人之會
ノ數算スルモノヲ見テ曰某ハ失算第一策某ハ失算二
策下蔡文姬力能弦ヲ指力如久人人愕然トシ仰
其面喟然トシノ賞歎之。以テ此ヲ奇異トス。即長ス
ルニ及テ無師メ算數ノ異妙以テ極ムルモノハ
古人ノ所謂雖無文王豪傑猶興ト云モノ是夫子
ノ謂ヒカ又旁ヲ學テ天官曆日。盡ク知。其大義自中
歲至百首。其神極。思演段。諸節。管招。差及角。衛。頭。

法弧背立園ノ術肇造之又等題三途ノ下千化也
變自在ヲナスベキ者又天官曆日其他凡等教ニ
與カルベキ者古人未發天地ノ間ニ秘スル所夫
子初テ悉ク發之卒ニ以テ輯錄之各門聚類テ數
百卷ノ書トナシ以テ後進ノ由路トナスコ、ニ
ヨツテ我東方言教者本之開夫子夫子授之荒水
子村英建部子賢弘荒水子ハ授之松永子良弼建
部子ハ授之中根子元珪而ノ閑夫子ノ書具雜記
ナルモノ夫子與荒水子未遑授離ノ而止モノ松
永子盡ク授離之略如己意閑夫子ノ書以テ大ニ
成ル又久留島子義太未知教ノ時始テ等書一二

篇ヲ取テ一誦メ悉ク知其義能言等教之壹臬即
徒衆又盛ニメ由是教有久留島學我先師山路先
生主佳始受業中根子後師事久留島子最後弟子
松永子先生沈審類招且資性篤實ナリ即ニ君子
悉ク授帳中之秘遺スナシト云夫ノ久留島子
實ニ仙才ト云トイハレ其性不羈其書見テ於
手一家ヲ立ツハカラス先生以其緒言妙語令閑
夫子之學用授門人稱天下大師徒衆尤盛ナリ然
レレ先生謙遜退讓之質常曰著述上本スルモノ
閑夫子及五君子其高足弟子ノ他ハ不可也奈何
トナレハ近世所上本等書見之杜撰岳誕不可

道此不獨自取笑賊夫人亦子也卜故自者不
工口ノ書トイハレ以テ此ヲ公ニ曰ク云云

南浦文集

鐵炮記

代種子嶋久時公

隅州之南有一嶋去州一十八里名曰種子。我祖世世居焉。古未相傳。嶋名種子者。此嶋雖小。其居民庶而且富。譬如播種之下一種子而生。無窮是故名焉。先是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦有一大船。不知自何國來。船客百餘人。其形不類。其語不通。見者以爲奇怪矣。其中有大明儒生一人。

名五峯者。今不詳其姓宗。時西村主事有織部丞者。頗解文字。偶遇五峯。以杖書於沙上云。船中之客。不知何國人也。何其形之異哉。五峯即書云。此是西南蠻種之賈胡也。粗雖知君臣之義。未知禮貌之在其中。是故其飲也。杯飲而不杯。其食也。手食而不箸。徒知嗜欲之愜。其憤不知文字之通。其理也。所謂賈胡到一處輒止。此其種也。以其所有。易其所無而已。亦可怪者矣。於是織部丞又書云。此去十又三里有一津。津名赤尾木。我所由賴之宗子。世世所居之地也。津口有數千戶。

富家昌。而南商北賈。往還如織。今雖繫船於此。不若要津之深而且不漣之愈也。昔之於我祖父惠時與老父時亮。時亮即使扁艇數十。挈之至於二十七日己亥。入船於赤尾木津。丁卯之時。津有忠首座者。曰州龍源之徒也。欲開法花一乘之妙。寓止津口。終改禪為法華之徒。號曰住來院。殆通經書。揮筆敏捷。偶遇五峯以文字通言語。五峯亦以為知己之在異邦也。所謂同聲相應。同氣相求者也。賈胡之長有二人。一曰牟食。一曰喜利。志多佻。孟火。手携一物。長二三尺。其為體也。

中通外直。而以重為質。其中雖常通。其底要密塞。其傍有一穴。通火之路也。形象無物之可比倫也。其為用也。入妙樂於其中。添以小團銀。先置一小白於岸畔。親手一物。條其身。眇具目。而自具一穴。放火則莫不立中矣。其發也如掣電之光。其鳴也如驚雷之轟。聞者莫不掩其耳矣。置一小白者。如射者之棲鵠於侯中之比也。此物一發。而銀山可摧。鐵壁可穿。其完之為仇於人之國者。觸之則立喪其魄。况於麋鹿之禍於苗稼者乎。其用於世者。不可勝數矣。時亮見之。以為希世之珍。

始不知其何名，亦不詳其為何用。既而人
為鐵炮者，不知明人之所名乎。抑不知我一
鳴者之所名乎。一日時堯重譯謂二人，堯種
曰：我非曰能之，願學焉。堯種亦重譯答曰：君
若欲學之，我亦罄其蘊奧以告焉。時堯曰：蘊
奧可得聞乎。堯種曰：在正心與眇目而已。時
堯曰：正心者，先聖之所以教人，而我之所以
學之也。大凡天下之理，不從事於斯，動靜云
為，自不能無差矣。公之所謂正心，豈復有異
乎。眇目者，其明不足以燭遠，加之何南眇其
目乎。堯種答曰：夫物要守約，守約者，以傳見

為未至矣。眇目者，非見之不明，欲守其約，界
致之遠也。君其察之。時堯喜曰：老子之所謂
見小曰明，其斯之謂歟。是歲重九之節，日在
辛亥，涓取良辰，試入妙藥與小團黏於其中，
置一小白於百步之外，放之火，則其殆庶幾
乎。時人始而驚，中而恐，而畏之，終而翕然亦
曰：願學。時堯不言其價之高而難及，而求堯
種之二鐵炮，以為家珍矣。其妙藥之精，師和
合之法，令小臣篠川小四郎學之。時堯朝磨
夕淬，勤而不已，嚮之殆庶者。於是百發百中，
無一失者矣。於此之時，紀州根來寺有杉

某公者不遠千里欲求我鐵炮時堯感人
求之之深也其心解之曰昔者徐君好季札
劍徐君雖口弗敢言季札心已知之終解寶
劍吾鳩雖褊小何敢愛一物且復我不求自
得喜而不寐十襲秘之而况求而不得豈復
快於心於我之所好亦人之所好也我豈敢
獨私於己而韞藏而藏諸卽遣津田監物丞
持以贈其一於杉坊矣且使之知妙藥之法
與放史之道也時堯把玩之餘使鐵匠數人
熟視其形象月鍛季鍊新欲製之其形制頗
雖似之不知其底之所以塞之其製亦甚種

賈胡復來於我鳩熊野一浦浦名熊野者亦
小廬山小天竺之比也賈胡之中幸有一人
鐵匠時堯以爲天之所授即使金兵衛尉清
定者學其底之所塞漸經時月知其卷而藏
之於是歲餘而新製數十之鐵炮然後制
其臺之形制與其飾之如鍵鑰者時堯之意
不在其臺與其飾在乎可用之於行軍之時
也於是乎家臣之在遐迹者視而效之百發
百中者亦不知其幾多矣其後和泉界有橋
屋又三郎者商客之徒也寓止我鳩者一二
年而學鐵炮者殆熟矣歸旋之後人皆不

而呼曰鐵炮又矣。然後畿內之近邦皆傳而習之。非翹畿內關西之得而學之而已。關東亦然。我嘗聞之於故老曰。天文壬寅癸卯之交。新貢之三大船將南遊大明國。於是畿內以西富家子弟進爲商客者。殆于千人。楸師篙師之操舟如神者數百人。艤船於我小嶋。旣而待天之時。解纜密橈。望洋向若。不幸而狂風掀海。怒濤捲雪。坤軸亦欲折。吁。時耶命耶。一貢船擱傾。擗摧。化鳥有去。二貢船漸而達於大明國寧波府。三貢船不得乘。而回我小嶋。翌年再解其纜。遂南遊之志。飽哉海貨。

垂珍。將歸我朝。大洋之中。黑風忽起。不知西東。船遂飄蕩。達於東海道伊豆州。州人掠取其貨。商客亦失其所。船中有我僕臣松下五郎三郎者。手携鐵炮。旣發而莫不中。其鵠矣。州人見而奇之。窺伺倣暴。有多學之者矣。自茲以降。關東八州。暨率土之濱。莫不傳而習之。今夫此物行乎我朝也。蓋六十有餘年矣。鶴髮之翁。猶有明記之者矣。是知嚮之垂種二鐵炮。我時堯求之學之。一發而聳動於技桑六十州。且復使鐵匠知製之之道。而徧於五畿七道。然則鐵炮之權與於我種子嶋也。

明矣。昔者採一種子之生，生無窮之義。名我
鳴者，今以為符，其識矣。古曰：先德有善，不能
昭昭於世者，後世之過也。因而書之。

薩隅日三州府君歷代歌

高祖忠久號得佛 始領三州曰嶋津
二世忠義稱道佛 現時上古其風淳
三世久經稱道忍 攻亡禮部安我民
給黎斯田其孫子 伊集院亦骨肉
忠宗道義建長間 都鄙謂之為歌人
其子貞久名道鑑 舍第六人國為隣
和泉孫子今殆盡 佐多新納共相親

樺山北鄉今猶盛 其中石坂跡獨泯
道鑑有子號河上 子孫至今更誦說
氏久齡岳六代主 創建即宗迹未陳
元久怒翁創福昌 一子為僧戴鳥巾
有弟久豐號義天 挑惠灯來尚循循
忠國大岳具諱譽 深固院古我松為
舍弟樵夫薩摩身 題橋豐州武威純
出羽伯春亦叔季 有且兄弟德已均
忠國宗子稱天勇 不嗣父位異天倫
大年登公天勇子 齊名一孰德不貧
立久第山民具瞻 龍雲廟古猶薦藪

忠昌圓室諱玄鑑
寺名興國近城闕
忠隆與岳不終晨
幾殺忠臣自沉淪
國亂其約皆不真
一瓢之子稱日新
更揚義兵無異論
仰見貴久悉稱臣
正是大中辭世辰
香烟不斷日輪因
是時六國臣伏臻
惟德被民民歸仁

從是三州諸家士
幸未林鐘二十三
海潮修梵南林寺
義久治國猶超古
以歌鳴世是餘事

令人景慕何至此
遐齡猶祝八千椿
新創妙谷預修善
碧瓦朱甍疊魚鱗
今身義弘兵庫頭
武威振世重千鈞
匪帝譽聲動我國
朝解八道誦名頻
歸依三寶修妙圓
無人不道希世珍
久保朝鮮撫軍日
惜罹微恙化作塵
家久多年在朝舞
壇施威武似有因
國務餘力嗜儒學
具本不亂壹修身
就中心學探其顛
入禪教門轉兩輪
細大不措藝冰一
揮劍揮筆共彬彬
球王未降何歲月
慶長己酉在莚賓

吾君命運幾多少，孫枝子葉億萬春。

討琉球詩并序

薩隅之南二百餘里有一島名曰琉球。使小島之在四方者并吞爲一而爲之首長矣。予聞之黃耇曰：昔者日本入王五十六代清和天皇之孫具名曰六孫王，本朝源家之曩祖也。八世孫義朝公令弟爲朝公爲鎮西將軍之日，掛千鈞強弩於扶桑，而其威武偃塞垣草木。是故遠航於海，征伐島時於斯時也。舟隨潮流求一島於海中，以故始名流求矣。爲朝見巢居穴處於島上者，頭雖似人之形，而戴一角於右鬢上，所謂

鬼怪者乎。爲朝征伐之後，有具孫子世爲島之主君，固築石屋於其上，因知鬼怪之容貌，結髮於右鬢上。至今風俗不異，中改流求二字，字從玉而爲琉球矣。黃耇之言，未知是否。首長之祖不知何誰。昔朝於大明皇帝，皇帝賜之衣冠，且錫爵位。今末世稱中山王，王稱亦至今不絕矣。數十世之先，爲我薩隅日三州太守島津氏附庸之國，歲輸貢獻於我州。比來不隨我號令者，有年於茲矣。是歲戊申，有太守家久公之命，遣二使於彼國。國素有三司官，國之公卿，世守其職。時有一聚斂臣名那那

者補一官闕。以汚公御之衣冠。邠邠見我二
使之未也。以色可否。以顯指揮。二使亦不知
所云。空手而歸矣。於是不得已。而使數千兵
行以討之。云云。漫賦俳諧體十章。云云。其二章
曰。欲伐鬼方揚白幡。諸軍威武動乾坤。樺山
右將平田左。添得伊川伴衛門。

○牽於章句文義者。儒生之學也。務得其要。
措之事業者。人主之學也。後射義書

○鳩津高祖忠久公者。右大將賴朝公第三
子。而始領若耶北越伊勢伊賀。且復領海西
薩隅日爲七州太守。德業弘公

○一部六百卷。二百六十有七品。六十二億
四十萬有餘字。看讀般若配性

○日本國薩摩州刺史藤原家久。星大明天使書

○日本國薩摩州刺史藤原義弘。復呂宋書

○日本國薩隅日三州太守藤氏家久。答安南書

跋曰。前建長文之老師。薩州譯玄昌。南禪大
明祖九世之遠孫。而桂庵翁四世之的孫也。
老師生于日州南郷外浦。故自号南浦。又東
福龍吟庵之門葉也。故其軒号雲興。蓋取于
龍吟雲興之義也。或曰。懶雲。或曰。狂雲。皆其

繪中福寿草

大田春川甫政 字子心 福山人

金山の花北海の江木此勝車の油いばまう終れさう
 のうすこふとね 昔年の色を物の色を細く
 ひせうおと書かして 筆葉よふはましく 彩をこぞ
 さしめんたうとめ水膠の加減を書かして 賜と
 ○ 摺水 帛地繪紙何ぞも画かんとすう付筆上を
 水一糸に書か膠すみりぞんかき膠はみりぞんかき
 幣よりして少々の書い多う一りも福福入炭火より
 かけ水のどくはかけとれを副をめて引
 ○ 緋青 極彩まれば水二緋花文のまらふ月也緋青一
 行く是法一ニ番にまらふ一ニ番の三番の極彩まらふに
 一りも膠水とまらふにせをけりてまらふ又花を青とまらふ

○ 緑青 草木の葉色一とまらふをけりてまらふ又花を青とまらふ
 葉をけりて白保とて白くまらふをけりてまらふ又花を青とまらふ
 若緑青一番より二番より三番より四番より五番より六番より七番より八番より九番より十番より
 まらふ

○ 唯 草 越下て草か花を彩一に月也或は菊山夜菜の
 まらふいやのまらふ用之但膠を加げ水もみり
 ○ 朱 一切れ方の花文とまらふをけりてまらふ又花を青とまらふ
 又墨を合して色彩をけりて色のまらふ月也或はひかへん花せん
 ら脂膏合のまらひ極彩を花より用之但膠を合はるべし
 ○ 丹 是も淡色を花より用之或はひかへん花せん

色にあらむもあつたをかくは用ひし一はつらうと名をいふ

○胡椒粉 粉にして白く花又をらうとすつらひにまきふらへて
あはらうを膠を加へ用ひてはるすまへて粉をふりかきし
すしとほちうと名をいふ解のどくにはとほちと名をいふ
わが地はるすし一はつらうと名をいふ

○胭脂 紫の花をさいしつらひの膠を少く加はらう
或はつらうと名をいふ白く紅花をさいふらひの膠を少く加はらう

○紫土 紫の花をさいしつらひの膠を少く加はらう或はつらう
あはらうと名をいふ花のぢうと名をいふ用ひし一はつらう

○草汁 草をさいしつらひの膠を少く加はらう或はつらう
あはらうと名をいふつらうと名をいふ

色にあらむもあつたをかくは用ひし一はつらうと名をいふ
あはらうと名をいふ

○白緑 粉にして白く花又をらうとすつらひにまきふらへて
あはらうを膠を加へ用ひてはるすまへて粉をふりかきし

○緋燕脂 粉にして白く花又をらうとすつらひにまきふらへて
あはらうを膠を加へ用ひてはるすまへて粉をふりかきし

○年栴 粉にして白く花又をらうとすつらひにまきふらへて
あはらうを膠を加へ用ひてはるすまへて粉をふりかきし

○黄土 粉にして白く花又をらうとすつらひにまきふらへて
あはらうを膠を加へ用ひてはるすまへて粉をふりかきし

○靛花 粉にして白く花又をらうとすつらひにまきふらへて
あはらうを膠を加へ用ひてはるすまへて粉をふりかきし

○金根泥 粉にして白く花又をらうとすつらひにまきふらへて
あはらうを膠を加へ用ひてはるすまへて粉をふりかきし

神の御心と申れんが、その御心は、
先づ坊院法、引くも、其後、河津の事、
其の事師の傳、あひだんき、
他山の事、我、
さうおね、
ま、
念、
の、
分、
も、

その御心と申れんが、その御心は、
先づ坊院法、引くも、其後、河津の事、
其の事師の傳、あひだんき、
他山の事、我、
さうおね、
ま、
念、
の、
分、
も、

○或者のまに梳はをていんうてもふ通との野梳をり奇怪
ろくろり諸史百家の書は後で略記せざるもいふべし
社人佛性中の徒多りて拒とどとらるる所付せし後
おづく巫覡あり彼者の説ある村元志をりるも人
右幸とてをりて計議し進ぶを後に入筆をりて野梳
性對して曰汝老梳能人情入るるなり情を言は
問ふとを言ふとや言ふとを言ふと野梳曰何れも用
言ふとを言ふとを言ふとを言ふとを言ふとを言ふと
やをりて曰野梳也いづれを言ふとを言ふとを言ふと
あれは先きの曰是或の下の所をりて何種あるの書を補
たりとも何の月と日をりて況野梳性の人を言ふとを言ふと

類々此とせしれりふは梳はをりて退きしとて先き其
尚書に於て人意の表は出さるるなり一初奇怪の老梳
びきに略記して人を誦するもの意のあらざるを略して
せしむ一英邁の才卓見の量るるべし一凡庸の儒にあ
らざるなり

○近頃ハ……本件ハ……續博物志ハ……
……天字の書に……
……或人……
……千載……
……今……
……後……

雷の音にうたがはるるに身をたすけしきりてはくもあは
れりとのうたをきくとさるる新魚の生肉をさう身を味をば
えのどしとや江州のまの店法が下僕を掃しるにち遠
かりとてり

○ 古き着袍袴衣あぶら製のもの上をとりてきりし今の
上りの袴とてりききる袴よきとてりや足利家の所より後
折と袷の後にゆきしを袴袴を帯の中ききとてりや
左指折の袷の服もきき袴のよき袴とてりききとてり肩
衣をとりし用も袴衣布直金などのよきとてりききとてり
一向宗門徒の袴にききとてりききとてり古風のききとてり
ききとてり

○ 田氣化してききとてりききとてりききとてり
かりとてり

○ サコブイとてりききとてり馬路古國よりあつたものといふ
のききとてり白湯とてりこれとてり酒の酔ひとてり
あつたききとてり

○ 袍袴とてりききとてり入るに此出とてりききとてり用は
とてりあつたききとてりききとてりききとてりききとてり
は法をばとてり

○ 漢書の食貨志より酒を亂退とてり
○ 法華のそ義とてり化彼とてり
○ 葵系とてり舟無の時舊記とてりききとてり

髪よりしこあはれをりしころみいぬはるひて
とみは懐中しはしきて髪の手をすちまひて
しゆくをれだまけしき髪を海しきとあり
りるしきもたああげたせうふまはるちやん
それよりけいごしひの念をさしきしりや人
のりりるあしき人かゝれ無のころしきとあり
くごしき無のころしき髪をさしきしりや人
さしきしき無のころしき髪をさしきしりや人
のりりる無のころしき髪をさしきしりや人
髪の手をすちまひて髪の手をすちまひて
定まつてけいごしひの念をさしきしりや人

あはれよりしこあはれをりしころみいぬはるひて
とみは懐中しはしきて髪の手をすちまひて
しゆくをれだまけしき髪を海しきとあり
りるしきもたああげたせうふまはるちやん
それよりけいごしひの念をさしきしりや人
のりりるあしき人かゝれ無のころしきとあり
くごしき無のころしき髪をさしきしりや人
さしきしき無のころしき髪をさしきしりや人
のりりる無のころしき髪をさしきしりや人
髪の手をすちまひて髪の手をすちまひて
定まつてけいごしひの念をさしきしりや人

をばあしとありまはしつゝあはれしとていふくちのあはれ
このあはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ

小國のあはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ
あはれとていふくちのあはれとていふくちのあはれ

ソ書有りを申し、杜仲とソ書有り、未冠
鳥長と阿れ、いふか、いふか、いふか、いふか、
杜仲の書、杜仲の書、杜仲の書、杜仲の書、
いふか、いふか、いふか、いふか、
杜仲の書、杜仲の書、杜仲の書、
いふか、いふか、いふか、いふか、

○南海先生纂評鍾秀集

源君美 字尚美又字熙世 稱新井氏自号曰白石
又曰錦屏山人 文廟朝授朝散大夫為

能州刺史

自題肖像 時奉使西上

蒼顔如鐵鑿如銀紫石積今電射人五尺小身渾是

瞻明時何用画麒麟

以公小色

○鳩居語

尾修平子成 著

夫醫之於疾也、必推其病之所自來、而治其受病之
處、病之中人、乘乎氣虛而入焉、則善醫者、不攻其疾、
而務養其氣、氣實則病去。

愚者不知己之愚而愚也、智者不知己之智而智也、
智者若自知、而誇其智、則非智也、愚者若自知、而憂
其愚、則非愚也。

唐廬州刺史李丹與妹書曰、天堂無則己、有則君子
登、地獄無則己、有則小人入。

○歸今本願抄言釋

惟古事記日本紀万葉集を不古のふと云ふ。いふに
イリて新撰字源竟平の以和名抄以美平の
まてふよち代イリ均くして一。其書とり今あ
書の推してれを暫後とありて拾遺方集などの以り
やまざり。水書といれ古言と忘れりつ
地何言をなむとあり所を以て失く。その系志人の
人此古書の訓つけらるる。言も惟古も何とあり人
在古のうらむと。うらむと一。あまそとくうりり
○又のうらむ義りてあしと。たも亦も訓やうらむ
却ていふうらむ。何とを平に古言も惟古とてあしと

むくて定むと。唯六万を限口乃泊漱とありと。限
原書に古事記に許世理久能波都世日本紀に
奉暮利能播都制とありと。平刀米と万葉に
處女幼女など。とありと。古事記に表登賣日本紀
よ少男此云鳥等孤少女此云鳥等。とありと
りて知。馬ハ推古天皇記に宇摩奈羅摩武
伽能古摩万葉に宇麻能都米都久志能佐伎示梅
ハ万葉に鳥梅宇米など。とありと。古今集にうらむと
記してあるうらむと。たありと。ぬかうらむと。あつ
の能事のうらむと。皆均くして。とありと。其の
とありと。馬の御座る。とありと。のうらむと。あつ
あつと。馬の御座る。とありと。のうらむと。あつ

○ 此秋秋の古言の假字をかきしめて能く読むと能く定まると
でいりぐ道なり。たゞしつゝのあつたうへに定つて後
も、言の意をとりあへず。後世の國の中あきりてそのまゝと
書くに違ひなきに、且古くわが國の書は、そのまゝのまゝ
書は後世の書と異なり、そのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
とて、そのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
を後世の書と異なり、そのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
かゝるまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
笑ぬと、そのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
直の工匠のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
後、そのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
今、後、そのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

○ 此より。秋れが一年のり、五人等分番交替して仕集
るが、番匠の志ありあり。譬に、官人、其まゝのまゝのまゝ
目し、仕まつり、番上と、日を隔て、番で仕まつり、
おと、
わがぢき、これ、理をさして、言へば、おの切ある時、そのまゝの
知つ、あつ、まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
意あり、まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
ゆあり、齊つ、言へば、まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

介忌と云ふ。ゆゑに齊國改國と大嘗祭と云ふ事多し。

○西要抄言釋

頌頌ゆゑに云ふ。ゆゑに結核の事をも結布をもと
所ゆゑに云ふ。知事も結核も深れ。ゆゑに深も云
す。今の志あり深も云ふ。の深。古の目深といひ別之。

○天子相迎言釋

ゆゑに云ふ。結核をも云ふ。何事も結核
ゆゑに云ふ。人の結核をも云ふ。ゆゑに云ふ
ゆゑに云ふ。顔目をも。顔面の事。包承及礼へ
ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。

ひが云ふ。ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。
例あり。ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。
古のゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。
ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。
ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。ゆゑに云ふ。

○西溪叢語

宋荆川姚寬今咸輯

周易遯卦。肥遯無不利。肥字古作斐。與古斐字相
似。即今之飛字。後世遂改爲肥字。九師道訓云
遁而能飛。吉孰大焉。張平子思玄賦云。欲飛遁
以保名。註引易上九。飛遯無不利。謂去而遷也。
曹子建七啓云。飛遯離俗。程氏易傳。引漸上九。

鴻漸于陸，為鴻漸于達，以小物汽濟，汽當為訖。
豈未辨證此耶。
論語云，觚不觚，觚哉，觚哉。太平御覽引此注云，孔
子曰，觚不觚，而志有所念，觚不時成，故曰觚哉，觚
哉。觚，小器耳，心不專一，尚不時成，況於大事乎。
觚，亦筒也。史游急就章云，急就奇觚，與衆異，注
云，觚者，學書之牘，或以記事，前木為之，或六面，
或八面，面皆可書，觚者，稜也，有稜角也。
許氏說文，念音呼介切，忽也。引孟子，孝子之心不
若是益，今所傳孟子曰，為不若是恕。趙岐注云，
恕，無愁貌。公明高以為孝子不得意於父母，自

當愁怨，豈可恕。恕然，無憂哉。許氏說文用古文
纂集成之，引用念字，恐為正也。鼎
眞質，質，偽也。韓非子云，宋人求鏡，魯人云，眞也。
齊人曰，質也。
劉向別錄云，雋拔書，一人持本，一人讀對，若怨家，
故曰雋書。
杜甫詩云，弩影落杯中，風俗通應彬為汲令，請主
簿，杜宣賜酒，壁上有懸赤弩，照於杯中，形如蛇
影，宣惡之，謂蛇入腹，遂病，後至其放處，知弩影遂
解，與廣客事相類。梁簡文臥疾詩云，況病類弩
影。

負竹無盛衰，媚柳先摧落。唐李濟翁資暇錄云。
古使字作李。揚柳二種。楊樹葉短柳樹葉長。
許叔微精於醫云。且臟去皆上行。唯有肺去下行。
最難治。當用懶瓜為末調藥。於初四初六日治
之。此二日肺炎上行也。

今人不善乘船。謂之若般。北人謂之若菓。若音庫。
孟子言去齊接淅而行。淅。漬米也。接字殊無理。許
慎說文引孟子。去齊境淅而行。境音具。兩切。漉
乾漬米。言不待炊而行也。異聞集李吉甫銘曰。
孟子去齊而境淅。唐亦作境字。

集韻引向秀云。孟浪無取舍之謂。孟音母。朗切。

犀以黑為水。其色黑而黃曰正透。黃而有黑邊曰
倒透。正者世人貴之。其形圓。謂之通天犀。南中
有偽者。磨之漸熟。乃驗犀往涼。磨之不熟。

○芥隱筆記

晉書。鄒湛對晉文帝曰。猛虎在山。荷戈而出。凡人
能之。蜂蠶發於懷袖。勇夫為之驚駭。出於意外也。
山石詩。霜威能折綿。風力欲冰酒。蓋用阮籍詩。陽
和微弱陰氣竭。海凍不流綿絮折。呼吸不通寒冽
冽。凌肩吾詩。勁氣方疑海。清威正折綿。張說。塞上
綿應折。江南草可結。語也。

耕田欲雨刈欲晴。么得順風來者怨。蓋用劉夢得

東坡泗州塔詩

同執于陸。其時在澤。伊種之喜。乃種之。必同舟于江。其時在風。沿者之言。汴者之去意。

東坡謂老杜竊比稷與禹。蓋求之於其詩。舜舉十六相。身尊道何高。秦時用商鞅。法令如牛毛。意特有所指。余以為見以老。容氏畜衆之度。莫若水深魚極樂。林茂鳥知歸。又林茂鳥攸歸。水深魚知聚。重言之。此其意有在。

醉翁迂叟東坡之名。皆出於白樂天詩云。

陳去非嘗語先君云。吾平生得意十字云。閉門知有雨。老樹半身濕。先君故劾之。作感興詩云。夜半微雨濕。凌晨春草長。謂顯正云。吾十字似有味。後

讀河嶽英靈集。陶訪詩。荒庭人何許。老樹半空曠。設藩謂皎然。可佳。殆亦有所祖云。

老杜安得廣廈千萬間。大庇天下寒士俱歡顏。嗚呼。何時眼前突兀見。以屋吾廬獨破受凍死。亦足樂天百姓多寒誰可裒。一身雖煖亦何情。安得大裘長萬丈。一時都蓋洛陽城。

高隱有照竄堯興舜典字。塗改清廟生民詩。樂天有毛詩三百篇後。得文選六十卷中無。

樂天有玉容寂寞淚闌干。梨花一枝春帶雨。不知又有薔薇詩。露垂紅萼淚闌干。

史記季布言陛下。以一人譽召臣。以一人毀去臣。

乃袒韓非子魯丹曰夫以一言善我必以一言深我

高祖隱太子建成傳云利兵廢之唾手可決用

九州春秋唾掌詔

左方謂簡冊之左唐書亦有此語

曲折出李廣傳轍天子失軍曲也

唐傳張昇疏人無故不應糾藥出千金方序論云

病患已成須勤藥餌故立補養之方平人無事不

宜著手

蘭亭款云後之視今亦猶今之視昔用京房傳詔

房曰臣恐後之視今猶今之視前也

乙

史記趙簡子曰鷺鳥累百不如一鴉鄒陽上書亦用之孔文舉薦祢衡表又用此語

墨子雖有賢君不愛無功之臣雖有慈父不愛無

益之子故曹植自試表云故慈父不能愛無益之

子仁君不能畜無用之臣

羊祜讓開府表云德未為人所服而受高爵則使

才臣不進功未為人所歸而荷厚祿則使勞臣不

勸用管子德業未明於朝而處尊位者則良臣不

進有功未見於國而有重祿者則勞臣不勸

淮南子水清則魚聚水茂而鳥樂所以老杜有林

茂鳥攸歸水深魚知聚

韓非子國平則養儒，俠難至則用介士。所養非所用，所用非所養。東坡六國論用此語。文記韓非傳法，使者以武犯禁云云，所養用所用以武犯禁云云，所

史記趙世家趙簡子有臣曰周舍，好直諫，舍死簡子每聽朝不悅，大夫請舉簡子曰：大夫無辜，吾聞千羊之皮不如一狐之腋，諸大夫朝徒聞唯唯，不聞周舍之鄂鄂，是以亡也。又商君傳，商君曰：我治秦孰與五殺大夫賢？趙良曰：千羊之皮不如一狐之腋，千人之諾諾不如一士之鄂鄂，必出於此。富貴他人令，貧賤親戚離。文選曹顏遠詩：又見晉書殷浩傳，蓋用慎子家富則疎族聚，家貧則兄弟

離語。慎子名到，學本黃老。

文選古詩何能待，未茲用呂氏春秋今茲美，未茲美麥，注茲年也。

文選古詩有思君令人老，曹子建有沈憂令人老，其亦出唯憂用老耳。文選古詩思君令人老，或時忽已晚。

○冷齋敘話 宋為州惠洪輯

東坡作海棠詩曰：只恐夜深花睡去，更燒銀燭照紅粧。事見太真外傳曰：上皇登沉香亭，詔太真妃子，妃子時即醉未醒，命力士從侍兒扶掖而至。妃子醉顏殘粧，鬢亂釵橫，不能再拜，上皇笑曰：豈是妃子醉真海棠睡未足耳。

李太白詩曰。昔作芙蓉花。今爲斷腸草。以色事他人。能得幾時好。陶弘景仙方注曰。斷腸草不可食。身花美好名芙蓉花。

白樂天每作詩。令一老姬解之。問曰。解否。姬曰。解則錄之。不解則芻之。故唐末之詩。近于鄙俚。老杜此征詩曰。唯昔艱難初。事與前世別。不聞夏尚衰。終自誅褒姒。意者明皇鑒夏商之敗。畏天悔過。賜妃子死也。而劉禹錫馬嵬詩曰。官軍誅佞幸。天子舍天姬。群吏伏門屏。貴人牽帝衣。白樂天長恨詞曰。六軍不發爭奈何。宛轉蛾眉馬前死。乃是官軍迫使殺妃子。歌詠祿山叛逆耳。孰謂劉白能

詩哉。其去老杜何啻九牛一毛耶。北征詩誠君臣之大體。忠義之氣。與秋色爭高。可貴也。

李榕冰善論文章。嘗曰。諸葛孔明出師表。劉伶酒德頌。陶淵明歸去來辭。李令伯陳情表。皆沛然從肺腑中流出。殊不見斧鑿痕。是數君子在後漢之末。兩晉之間。初未嘗以文章名世。而其意超邁如此。吾是知文章以氣爲主。氣以誠爲主。故老杜謂之詩史者。具大過人。在誠實耳。誠實著見。學者多不愧。

司馬溫公童稚時。與群兒戲于庭。庭有大甕。一兒登之。偶墮甕水中。群兒皆棄去。公則以石擊甕。水

因穴而逆，兒得不死，蓋其活人手，改乙見于紹興中。至今京洛間，多為小兒擊壤圖。石叟鄉隱于酒，謫仙之流也。善戲謔，嘗出報慈寺。取者失控馬驚，曼卿墮地，從吏驚遽，扶掖據鞍，市人聚觀，意其必大詬怒。曼卿餘看一鞭，謂馭者曰：「賴我石學士也。」若瓦學士，顧不破碎乎。張丞相好草書而不工，當時流輩皆譏笑之。丞相自若也。一日得旬，索筆疾書，滿紙龍蛇飛動，使姪錄之。當波險處，姪困然而止，執所書問曰：「此何字也？」丞相熟視久之，亦自不識，詎其姪曰：「胡不早問，致予忘之。」

居東集雜纂

陳留謝肇淛輯

劉庭式齊州人，蘇軾知密州，庭式為通判。初庭式未遇時，約取鄉人之女。及第後，女喪明，庭式卒娶之。女死，喪踰年，而哀不衰。因不復娶，軾問曰：「哀生於愛，愛生於色，君愛何從生，哀何從出？」庭式曰：「吾知喪吾妻而已。若綠色生愛，緣愛生哀，色衰愛弛，吾哀亦忘。則凡揚袂倚市，目挑而心招者，皆可以為妻耶？」軾深感其言。庭式後監太平觀，老於廬山，絕粒不食，而面目奕奕，有光。步峻坂如飛，近百歲乃卒。宋政和中，禹城縣孝女村，崔志有女，甚孝，母臥

病久忽思魚食而不可得。其女曰：聞昔者王祥臥求而得魚，想不難也。兄弟皆曰：盡信書則不如無書。汝女子何妄論古今。女曰：不然。父母有兒女者，本欲養生送死，兄謂女不能耶。乃同乳媪焚香誓天，即往河中卧求。凡十日得魚三尾，鱗鬣稍異，歸以饋母食之。所病頓愈。人或問方臥求時，曰：以身試水，殊不覺寒也。

招遠縣南二十五里有李氏者，其父採石青於南山，為蟻所吞，女聞而往哭之，誓見父屍與之俱死。哭三晝夜，天大雷電，蟻腹暴裂，父死見尚模糊可辨。李氏負土埋之，既畢遂觸石而死。有

司為之立祠。

本朝洪武初，乘氏曹州城有老嫗，遇異人，指州治前石獅，語之曰：此獅之目若赤，則水患至。汝於其時亟去，可免也。嫗異之，日往視其獅，州人怪問之，知其故，陰以硃塗於獅之目。嫗見其赤，不知其為硃也。遂亟走數石步，回視之，則州城果為巨浸矣。

大名顏君悅，道為諸生時，夢登一臺，四面宏敞，東望不石步，海濤萬頃，碧色際天。既覺，心異之，常以語人。時有宦於齊者，答曰：據夢中境界，甚似齊之瑯琊臺也。顏因更其號曰瑯琊，越十餘

春去矣 史道徳世

春去矣 史道徳世
いふやうに 頃の集り 育ち 草薙 つけて あらう
いそぎ

進上 源

右葉之 薮 蒲 草

千載 五月 如 田 可 菴

とあつた 方三 句と 落夕の 志むと ありが かりた
たのう 頃の 集り 風流 せしめ たり ありた
きつて ても 志むと けき せしめ たり ありた
いそぎの 集り たり あり あり あり あり あり

進上 右葉之 帯 たる

おもしろ 女今 若さ けい 院の 山 河 音 江 帥 草
蒲と たり たり たり たり たり たり

進上

水邊 音 蒲

千年 五月 五日 大江 為 武

いそぎの 集り たり あり あり あり あり あり
いそぎの 集り たり あり あり あり あり あり
いそぎの 集り たり あり あり あり あり あり
いそぎの 集り たり あり あり あり あり あり
いそぎの 集り たり あり あり あり あり あり

あるれは世を弄い名をかゝるるものありあはれり一四の
凡流ありて一東見記には時匡唐の太宰府よりて賦
ずしきものあり人々匡唐の名を以てらるるものあり
是より一は流月法は八十の字と枝と終るものあり
凡流と名ひあはる

進上

長節竹杖

萬年月

以上 坂島成

と堅紙よりしてをわたりて小字を唐よりてみよく人
ありて

あるべきあり竹の杖よりてつぎもてわがはのたのむ
ともむこれに進上以上の字を具したるものあり
るよきとまはれびく心とともてらるるものあり
成志する人ありきをこゝろあり

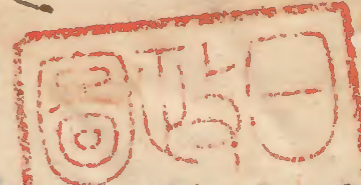
佐川田在六が陽明家へ定程をもちて

おとくの中さるる二も一年の角もたてて

進上

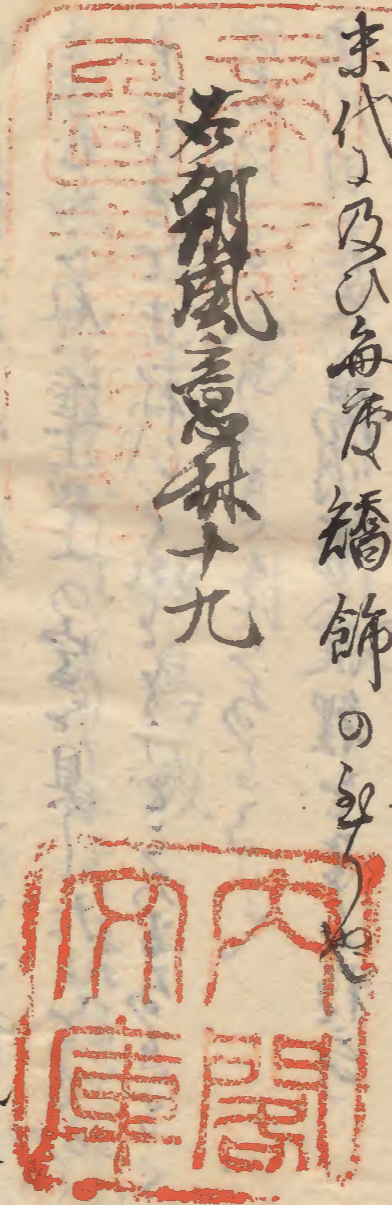
魚の名のそれありて昨日の初とちよと二も一年の角文字
海人藤本

凡装束の衣文上代は流月及びは名好院の流代
より流月装束を用ひて衣紋の流は東よりなる



上代に皆大装束とて少くもして流く事洞也
 初より流装束の衣領をきくは給原のふまは
 事人知くで或は難を吹或は差も人も掃く
 如きは終ても悪くてもあらん凡被清代に
 の色と括り取頭をきくもみ合を付事一切

古刺嵐言意林十九



紙数四拾九枚

09

